

(統計史料でみる昭和・平成期【その1】附録3)

昭和26年に刊行された本邦初の本格的統計史「総理府統計局八十年史稿」

奥積雅彦（総務省統計研究研修所教官）

総務省統計局の前身となる組織は、明治4年（1871年）、太政官に設けられた政表課が始まりとされ、令和3年（2021年）度には太政官に政表課が置かれてから150年の節目を迎えました。これまで、120年、100年、80年などの節目にも記念事業が行われてきたところ。本稿では、総理府統計局開設80年記念事業の一環として昭和26年（1951年）に刊行された「総理府統計局八十年史稿」について紹介します。

1 総理府統計局開設80年記念事業

総理府統計局80年開設記念事業は、昭和26年（1951年）11月26日に記念式典（於：早稲田大学大隈講堂）、同年12月に「総理府統計局八十年史稿」の刊行などが行われました（【別記】参照）。

【一口メモ】80年記念式典が統計局の源流につながる統計院（明治14年^{1881年}創設）の初代院長であった大隈重信とゆかりのある場所で挙行されたことは感慨深いものがあります。

開設80年を迎えた昭和26年（1951年）は、時あたかも、サンフランシスコ平和条約が締結（9月）され、日本が新たな局面を迎えた節目の年でもありました。

ここで記念式典における吉田茂内閣総理大臣の祝辞が「総理府統計局八十年史稿」に掲載されていますので、これを紹介します。

・吉田茂内閣総理大臣の祝辞

本日ここに総理府統計局開設八十周年祝賀の式典を挙げられるにあたり、一言所見を申し述べます。わが国における官庁統計事業は明治四年十二月二十四日*当時の太政官正院中に政表課として統計事務主管の部局が設置されたのがその最初であります。

爾来八十年間制度上数次の変遷はありましたが、統計局は、終始この官庁統計事務の中心機関としてわが国統計の進歩発達に貢献して参ったのでありまして、この間における関係者諸君の努力は大いにこれを多としなければなりません。

統計事務は、まことに地味な仕事であります、これが国政のそもそもの基本であることは改めて申すまでもありません。

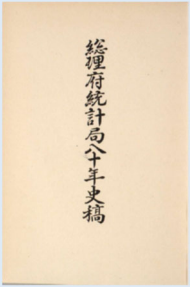
殊に近く平和条約の発効をひかえて諸政刷新合理化の必要の痛感されております際、統計業務に課せられた役割はまことに大なるものがあり、真に国政の基本としての実用を發揮しようとするの有用な統計資料を国家社会に提供するために益々努力せられんことを希望するものであります。終に多年本局に勤務せられ本日この記念すべき日に表彰の栄をになわれました諸君に対し心から敬意を表します。

以上所見を述べて私の祝辞と致します。

*太政官政表課の設置時期については諸説があるところ（→統計図書館コラム【No. 1001】「太政官政表課の設置時期」）。

2 総理府統計局八十年史稿の構成等

「総理府統計局八十年史稿」の森田優三総理府統計局長の序文において「八十年の足跡を一巻におさめて、本邦統計史の一資料たらしめんとしたものである」とし、大きく8つの時代に大別し、各時代別にそれぞれ機構・職員・主要事業が記述されています。構成等は次のとおりです。

<p>【中表紙】</p>  <p>【画像】：統計図書館所蔵</p>	<p>【構成】（本文758頁）</p> <p>第一篇 総説</p> <p>第二編 太政官時代</p> <p>第三編 第一次内閣統計局時代 （附。第一次統計局時代・統計課時代）</p> <p>第四編 国勢院第一部時代</p> <p>第五編 第二次統計局時代</p> <p>第六編 第二次内閣統計局時代</p> <p>第七編 第三次統計局時代</p> <p>第八編 第三次内閣統計局時代</p> <p>第九編 総理庁および総理府統計局時代</p>	<p>【書誌情報】</p> <p>書名：「総理府統計局八十年史稿」</p> <p>発行年月：昭和26年（1951年）12月</p> <p>発行者：総理府統計局</p> <p>国立国会図書館デジタルコレクション（※国立国会図書館内/図書館・個人送信限定）で閲覧可能 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3027573/4</p>
--	---	---

また、同書の例言において、次の記述があり、その趣旨、編集方針などが端的に著されています。特に、2パラにおいて、時局柄リソースの確保が困難であった旨のくだりがあり、当時の時代背景を考えると、同書の作成に当り、さまざまな制約があったことをうかがい知ることができると思います。

例言

- 一 本書は、昭和二十六年十一月、総理府統計局開設八十年記念式典挙行に際し、関係者および関係団体等へ配布する目的をもって編集したものである。すなわち、明治四年末本局の前身、太政官正院政表課の開設以来、昭和二十六年に至る約八十年間における本局機構の変遷・職員の異動並びに主要事業の回顧に資そうとするものである。
- 一 本書は、本書の使命が、わが国統計史に重要な中心資料を提供するにあることを自覚し、量よりも質において適正な記述をなすべく、資材の選択と表現に努めた。しかし、時局柄、これがため多額の編集費と多数の専任編集員を配することが困難であった等のため、必ずしも、利用者の期待に副^そったものとなっておらぬことと想う。が、それは向後における資材の充実と識者の示教に俟^{まち}たいと想う。
(以下略)

3 序文に凝縮された八十年の足跡

「総理府統計局八十年史稿」の森田優三総理府統計局長の序文において、80年の足跡を次のように回顧しています。同書は、我が国における統計の創始期の足跡から始まって、戦後における我が国の統計を再建するための新たな統計制度のもとで、世界センサスの一環として実施された直近の昭和25年国勢調査の成功に至るまでの足跡を知ることができる本格的な統計史であるといえます。

序

…

顧みれば明治政府が維新草創の際に、夙に統計の重要性に着眼して政表の事務を開始し、日本の官府統計が今日早くも八十年の齢を重ねるに至ったことは、文化日本の大きな誇でなければならない。その間幾多の迂余曲折を経つつも、歴代の局関係者が至誠ただその天職^{つと}をもって公に奉ずるの努力を重ねてきた結果、日本の統計を世界の水準において極めて高い存在たらしめたとともに、統計局今日の盛大を実現せしめるに至ったのである。ことに明治三十一年以降五十余年間、その成果において国際的関心の的であった人口動態統計調査事務の企画と遂行、その実現に至るまで実に幾多の難関を克服しなければならなかつた大正九年第一回以降毎回の国勢調査の実施と改善、世界二十八カ国よりの参加者を得て昭和五年わが国にはなばなく開催された第十九回国際統計協会会議等々、わが国の官府統計の中枢機関として統計史上に残した各種の偉大な記録は、戦後世界センサスの一環として先般成功裡に完了した昭和二十五年国勢調査の新らしい足跡とともに永久に忘れ難いものであろう。

…

昭和二十六年十二月

総理府統計局長 森田優三

4 おわりに

「総理府統計局八十年史稿」は、先人の偉業が1冊に凝縮されています。統計史から学ぶことは、未来に役立つことはいうまでもありません。そして、総理府統計局は、総務庁統計局を経て、現在の総務省統計局に至っています。統計局創設150年を経過し、我々は、後世に、史実を正確かつ冷静に伝えなければならないと…改めて認識しました。

【別記】総理府統計局八十年記念事業の概要

昭和 25 年 (1950 年)	
3 月	統計局総務課に記念誌編集室を特設、総理府統計局八十年史の編集事務を開始 ※記念誌編集室は、主任：加地成雄*、技官：笠原芳江、事務官：岡田定一の3名で構成
昭和 26 年 (1951 年)	
1 月	局内に総理府統計局八十年記念事業計画委員会を設置 ※委員長（森田優三統計局長がつとめる）、委員（部課長から9人を任命）、幹事（局員から9人を任命）で構成
7 月	記念植樹（いちょう 10 本）
11 月 26 日	記念式典（於：早稲田大学大隈講堂）の挙行 ・開会の辞（森田優三統計局長） ・吉田茂内閣総理大臣の祝辞（益谷秀次国務大臣が代理） ・来賓の祝辞 （中央官庁統計部局長代表）中央統計委員会委員長 大内兵衛 （地方統計主管課長代表）東京都総務局統計課長 津野清海 （縁故者代表）元内閣統計局長 牛塚虎太郎
11 月 27 日～12 月 1 日	記念展覧会（於：統計局庁舎内）の開催
12 月	「総理府統計局八十年史稿」刊行

【参考資料】「総理府統計局八十年史稿」等

*加地成雄：明治 24 年（1891 年）生まれ。明治 44 年、東京府（内務部庶務課統計係）を経て、島根県、栃木県（統計課長）、統計局事務嘱託等を歴任。明治 44 年（1911 年）から昭和 37 年（1962 年）までの 51 年間、地方及び国の統計業務に従事。統計職員養成所で本邦統計史を講義。著書「杉亨二伝」、「市町村勢要覧の作り方」。

【参考資料】日本統計協会『統計』14(7)（1963-07）（藍綬褒章受章者の紹介）、加地成雄「杉亨二伝」（はしがき）、「総理府統計局八十年史稿」（例言）等

【あとがき】

本稿のタイトルで「総理府統計局八十年史稿」をして本邦初の本格的統計史としました。これは、明治、大正、昭和にわたる長いスパンの史実を俯瞰できる初めての統計史であることによるものです。

ちなみに、それまでの、太政官政表部門、統計院、国勢院第一部の各時代における史実に係る主要な史料の書誌情報等^{(発行時期、頁数、サイズ(長辺)等)}は次のとおりです。

■：統計図書館蔵書

■ 政表課誌 1881年発行(本文126頁、23cm)

太政官政表部門(明治4年(1871年)から明治14年の「統計院」設置に至るまで)の史実に係る日誌
(国立国会図書館デジタルコレクション(※国立国会図書館内/図書館・個人送信限定)で閲覧可能)

⇒統計図書館コラム【ピックアップ・コラム】参考資料【号外】

- >【作業用資料】政表課誌テキスト版(暫定版)(その1 明治4年~9年)
- >【作業用資料】政表課誌テキスト版(暫定版)(その2 明治10年~14年)

■ 統計院誌 1886年発行(本文96頁、28cm)

太政官統計院時代(明治14年の統計院創設から明治18年内閣統計局が設置に伴い同院が廃止されるまで)の史実に係る日誌

(国立国会図書館デジタルコレクション(※国立国会図書館内/図書館・個人送信限定)で閲覧可能)

⇒統計図書館コラム【ピックアップ・コラム】参考資料【号外】>【作業用資料】統計院誌テキスト版(暫定版)

■ 太政官沿革志二十九(統計院沿革) 1887年作成(本文167頁)

統計院の沿革を取りまとめたもの

(国立公文書館デジタルアーカイブで閲覧可能)

■ 国勢院第一部 1921年11月発行(本文53頁)

国勢院*第一部に係る事務事業の記録

(国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能)

*国勢院は、大正9年(1920年)に統計局と軍需局とを併せて創設(統計局は同院第一部に)され、大正11年に廃止(国勢院第一部は内閣の統計局(外局)に)。

(関連史料)

◆ 太政類典

慶応3年(1867年)から明治14年(1881年)までの太政官日記及び日誌、公文録などから典例条規(先例・法令等)を採録・浄書し、制度、官制、官規、儀制等19部門に分類し、年代順に編集したもの

(国立公文書館デジタルアーカイブで閲覧可能)

◆ 官報

法令その他政府から一般への周知事項を編纂し、刊行した国の機関紙(明治16年(1883年)7月2日創刊)

(明治16年(1883)7月2日の官報創刊日から昭和27年(1952)4月30日までの官報は、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能)

◆ 明治史要

慶応3年(1867年)10月14日の大政奉還から、82年(明治15)12月30日までの史実の綱文(こうぶん)と典拠史料名を、編年体で日を追って記した史書

(国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能)

【参考】総理府統計局八十年史稿以降の史実に係る史料の書誌情報等^{(発行時期、頁数、サイズ(長辺)等)}

■ 総理府統計局八十年史稿 1951/12発行(本文758頁、21cm) (国立国会図書館デジタルコレクション(※国立国会図書館内/図書館・個人送信限定)で閲覧可能)
■ 総理府統計局百年史資料集成 ※赤字は発行年月(本文頁数)、各22cm 第一巻 総記 上 1973/03(787)・下 1990/09(666) 第二巻 人口 上 1976/03(995)・中 1983/03(939)・下 1989/12(854) 第三巻 経済 上 1984/08(1104)・下 1984/03(908) (国立国会図書館デジタルコレクション(※国立国会図書館内/図書館・個人送信限定)で閲覧可能)
■ 統計局の百年 1971/10発行(本文30頁) (国立国会図書館デジタルコレクション(※国立国会図書館内/図書館・個人送信限定)で閲覧可能)
■ 統計局・統計センター120年史 1992/06発行(本文751頁、27cm) (国立国会図書館デジタルコレクション(※国立国会図書館内限定)で閲覧可能)
■ 120年の歩み 1991/03発行(本文44頁、30cm) (国立国会図書館デジタルコレクション(※国立国会図書館内限定)で閲覧可能)
■ 統計150年の歩み(2022/12発行、本文48頁、30cm) (総務省統計局HP(統計150年の軌跡をたどる>統計150年の歩み)で閲覧可能)

■：統計図書館蔵書